

ルカによる福音書24章「すべて成就する聖書」

1A イエスの言葉の思い出し 1-12

1B 御体が見当たらない事実 1-3

2B 途方に暮れる反応 4-8

3B たわごとだとする使徒たち 9-12

2A 聖書全体の説き明かし 13-35

1B 出来事の論じ合い 13-16

2B 死でお終いになった彼らのイエス 17-24

3B 苦しみの後の栄光 25-27

4B パン裂きにより開かれる目 28-35

3A 悟るため開かれた心 36-53

1B 真ん中に立つイエス 36-43

2B 聖書に根差す福音 44-49

3B 昇天の祝福 50-53

本文

ルカによる福音書 24 章を開いてください。私たちはついに、福音書のクライマックスである、私たちの主イエス様の復活の記事を読むこととなります。ルカは、この福音書の書き出しで、テオフィロという人に、「すべてのことを初めから綿密に調べていて、すでにお受けになった教えが確かであることを、よく分かっていたいただきたいと思う」ということを書いていましたが、そのルカの執筆が最後の出来事のところで、その綿密さがうかがい知れる内容となっています。それぞれの福音書の著者が、その情熱によって何かを伝えたいと思いがあって、それで書いていますので、少しずつその記述も異なっています。どこに重きを置いているのか、ルカによれば、「キリストの苦しきは、間違いなく聖書の通りだったのだ」ということです。

1A イエスの言葉の思い出し 1-12

1B 御体が見当たらない事実 1-3

1 週の初めの日の明け方早く、彼女たちは準備しておいた香料を持って墓に来た。2 見ると、石が墓からわきに転がされていた。3 そこで中に入ると、主イエスのからだは見当たらなかった。

いつも話していますが、聖書の章の区分は元々は存在しなかったのですが、23 章最後のところからの続きです。「55 イエスとともにガリラヤから来ていた女たちは、ヨセフの後について行き、墓と、イエスのからだが見られる様子を見届けた。56 それから、戻って香料と香油を用意した。そして安息日には、戒めにしたがって休んだ。」女たちが香料と香油を用意します。安息日になるの

で、戒めを守ってその時は葬ったけれども、遺体に香料と香油を塗る時間がなく、それで三日目の朝に出かけていきます。こうして、彼女たちは確かに、イエス様が十字架で死なれて、確かに葬られたことを確認しています。彼女たちだからこそ、イエスが確実に死なれたことの証言者であり、彼女たちが初めの復活の目撃者となり、裁判で言うならば、この証人によって裁決が出たというような決定的な証人となります。

「見ると」という言葉をルカは使っていますが、石は確かに封じられていたはずですし、男性が 2-3 人いなければ転がすことのできない重さでした。マタイによる福音書によると、ユダヤ人の宗教指導者たちは、総督ピラトに、イエスが復活すると言っていたから、弟子たちがその体を盗み出し、イエスが甦ったというかもしれないと申し出ていたのです。それで番兵を付けて、見張らせました。ところが、石が転がしてあります。

2B 途方に暮れる反応 4-8

4 そのため途方に暮れていると、見よ、まばゆいばかりの衣を着た人が二人、近くに来た。5 彼女たちは恐ろしくなって、地面に顔を伏せた。すると、その人たちはこう言った。「あなたがたは、どうして生きている方を死人の中に捜すのですか。6 ここにはおられません。よみがえられたのです。まだガリラヤにおられたころ、主がお話しになったことを思い出さない。7 人の子は必ず罪人たちの手に引き渡され、十字架につけられ、三日目によみがえると言われたでしょう。」8 彼女たちはイエスのことばを思い出した。

彼女たちは、イエス様のご遺体がないことを見て、確認しました。イエスの身体がない、という事実があります。その事実に対して、「途方に暮れている」とあるのです。彼女たちにとっては、そこに遺体がないわけにはいけなかったのです。それがいないのですから、その事実をどう解釈する立場良いのか分からず、途方に暮れていました。ここで私たちは大きな教訓を学びます。「私たちの肉眼で見る事実は、信仰の目で見なければ意味がない。」ということです。遺体がないということは、誰かが取っていったのか、何なのか？けれども、石は転がしてあったはずですから、そんなことも考えにくい。私たちは、こうであるはずだという、それも信仰というか、思い込みというか、自分の思っていることによって生きています。彼女たちにとっては、イエスは死んだのだから、遺体はそこになければいけなかったのです。

しかし、主からの言葉が、真実を伝えます。遺体がないという事実があるけれども、それはどういうことかの意味を伝えるのが真実です。それは、「よみがえらえた」ということです。今、ここで神からの使信を伝えているのは、「まばゆいばかりの衣を着た人が二人」とあります。マリアがイエス様を身ごもった時、天使ガブリエルが彼女に近づいて、いと高き方の子、ダビデの子をマリアが宿したことを伝えにきました。同じようにして、非常に大切な、神の強い介入のある出来事について、御使いが告げに来たのです。しかも二人です。律法では二人か三人の証人によって、事実と認め

られるという戒めがあり、ここで彼らの告げていることは真実であると確認しています。

「あなたがたは、どうして生きている方を死人の中に捜すのですか。」というのは、実に皮肉です。彼女たちは、具体的なことで主に仕えてきました。主また弟子たちの食事であるとか、洗濯もしていたかもしれませんが、そういった雑用や家事のようなところで仕えていたことでしょう。同じようにして具体的に仕えるために、主のご遺体に香油を塗ろうとしていました。ところが、すでに生きておられるのに、それでも死んだ方に仕えようとしていました。私たちが、信仰をもってここに主が生きておられるということを見失っている時に、もしかしたら、このようになっているかもしれません。自分は主に仕えていると思っているけれども、実は生きておられる主を見ておらず、見当はずれなことをしているということです。

そして、「ここにはおられません」と言っています。復活の事実の核心部分を、端的な言葉で言い表しています。今、イエスが葬られた墓があります。可能性として、聖墳墓教会と園の墓です。しかし、そこに私たちの主イエスはおられません。園の墓には、「ここにはおられません。よみがえらえたのです。」という看板がかかっています。主は、今生きておられます。ある牧師が、まだソ連が崩壊していない時に、観光に行きました。何時間も、特殊な液体によってそのまま保存されているレーニンの墓があります。彼はガイドに、「身に行く必要はない」と言いました。これぞ、見ておかなければいけない第一の場所なのに、ガイドは不思議に思いました。彼は、「私の恋い慕う指導者は、墓にはもういないんですよ。」全く理解できない表情をしていたので、「生き返ったのです」と言ったそうです。そしてその場で彼女をイエス様への信仰に導いたそうです。

そして、主が十字架につけられ、三日目によみがえられることを語っておられたことを思い起こさせています。主は、ガリラヤにおられた時から、ご自身が語られたとおりに事を進めておられました。何か思いを変えたわけではないのです。問題は、イエス様が思いを変えたことではなく、その通りに信じていなかったことです。それで、何が起きているのか分からずに、途方に暮れてしまっていたのです。ここは私たちの絶えざる挑戦です。主のみこころより、自分の思い込みや考えが強くなって行って、いつの間にかそこから離れてしまっていることに気づかないでいるのです。ですので、女たちが「思い出した」とありますが、「思い出す」ことが必要です。これを行われるのは、神の聖霊であります。「ヨハ 14:26 しかし、助け主、すなわち、父がわたしの名によってお遣わしになる聖霊は、あなたがたにすべてのことを教え、わたしがあなたがたに話したすべてのことを思い起こさせてくださいます。」聖霊によって、主のことばを思い起こさせていただくことによって、生ける主、よみがえられた主にお会いすることができます。

3B たわごとだとする使徒たち 9-12

9 そして墓から戻って、十一人とほかの人たち全員に、これらのことをすべて報告した。10 それは、マグダラの MARIA、ヨハンナ、ヤコブの母 MARIA、そして彼女たちとともにいた、ほかの女たちで

あった。彼女たちはこれらのことを使徒たちに話したが、¹¹ この話はたわごとのように思えたので、使徒たちは彼女たちを信じなかった。¹² しかしペテロは立ち上がり、走って墓に行った。そして、かがんでのぞき込むと、亜麻布だけが見えた。それで、この出来事に驚きながら自分のところに帰った。

女たちが使徒たちに報告しています。ルカは具体名を挙げて、確かにこの女たちが、また他にもいた女たちが伝えたことを記しています。しかし、使徒たちは「たわごとのように思えた」としています。これは、気がおかしくなった人に使われる言葉です。「女による証言は確証を得られない」という、当時の文化を反映した考えがあることをにおわせています。しかしルカは注意深く、主が、男だけでなく女もご自分の働きのために用いられています。

とはいっても、彼らの気持ちを思い図ると、自分もそこにいたらそうになっていたと思います。あまりにも失望してしまい、落胆してしまい、もう信じるのが恐くなっていたかもしれません。信じることで傷ついた彼らは、もうこれ以上傷つくたくないという気持ちがあったのでしょう。おまけに、女たちが言っている、ということです。

ここで、あのペテロが出てきます。イエス様に、サタンによってふるいにかけてられたが、信仰がなくならないようにイエス様に執り成していただいていたペテロです。三度、イエス様を知らないと否定しましたが、しかし、今、この話を聞いた時に一目散に、墓に走って行って確認しに行っています。彼の心には、信仰がまだ取られていませんでした。彼は、女たちの次に主が生きておられることを証言する者となります。

2A 聖書全体の説き明かし 13-35

次に話は、エマオの村に向かう二人の弟子たちに移ります。女たちは、主の語られた言葉を思い起こして、主がよみがえられたことを信じましたが、弟子たちには、聖書全体からの説き明かしが必要でした。イエス様が彼らに近づかれます。

1B 出来事の論じ合い 13-16

¹³ ところで、ちょうどこの日、弟子たちのうちの二人が、エルサレムから六十スタディオン余り離れた、エマオという村に向かっていた。¹⁴ 彼らは、これらの出来事すべてについて話し合っていた。¹⁵ 話し合ったり論じ合ったりしているところに、イエスご自身が近づいて来て、彼らとともに歩き始められた。¹⁶ しかし、二人の目はさえぎられていて、イエスであることが分からなかった。

二人は、エルサレムを離れています。そして、イエス様が十字架につけられたことについて話し合っています。この女たちの証言があったのにもかかわらず、失望と失意に満たされていたため、エルサレムにいる必要を見失いました。エルサレムというのは、神の国が立てられる都であります。

多くの神の約束がエルサレムに対してなされます。そのエルサレムを離れ、どこか分からないところに行くということは、神への希望や信仰を失って、さまよい始めていることも示しています。

そして、「二人の目はさえぎられてい」とあります。ルカは、ここで初めて復活されたイエス様の姿を書き始めています。けれども皮肉なことに、イエス様のことを語り合っ論じ合っているところに、その本人がやってきました。それで、本人であることが分からないという皮肉です。ここの「さえぎられていた」という言葉には、何かの力や支配を受けているという意味合いがあります。単にイエス様の風貌が、以前と異なるということではなさそうです。マルコ 16 章 12 節に、こう書いてあります。「それから、彼らのうちの二人が徒歩で田舎に向っていたとき、イエスは別の姿でご自分を現された。」別の姿であったということです。復活後の主のお姿について、どのようなものであったか、いろいろな議論がありますが、このマルコの書いた箇所から、別の姿になっていたことが分かります。けれども、風貌が目さえぎっているではありません。もっと霊的なものであり、何らかの力が働いているのです。心が鈍くなっていて、それでイエス様をイエス様だと分からなくされていたのです。「Ⅱコリ 4:4 彼らの場合は、この世の神が、信じない者たちの思いを暗くし、神のかたちであるキリストの栄光に関わる福音の光を、輝かせないようにしているのです。」信じないと、見えるものを見えなくさせる、世の神の仕業、サタン仕業があります。

2B 死でお終いになった彼らのイエス 17-24

17 イエスは彼らに言われた。「歩きながら語り合っているその話は何のことですか。」すると、二人は暗い顔をして立ち止まった。18 そして、その一人、クレオパという人がイエスに答えた。「エルサレムに滞在していながら、近ごろそこで起こったことを、あなただけがご存じないのですか。」19 イエスが「どんなことですか」と言われると、二人は答えた。「ナザレ人イエス様のことです。この方は、神と民全体の前で、行いにもことばにも力のある預言者でした。」

イエス様のほうから話しかけておられます。そして、イエス様に対して、「エルサレムに滞在していながら、近ごろそこで起こったことを、あなただけがご存じないのですか。」と驚いて、熱くイエス様について語り始めます。午前礼拝でお話したように、彼らはまだイエス様を愛していたのです。ここで注目したいのは、イエス様が聞き出しておられることです。彼らの思いを知らないから聞きだすのではなく、彼らが自分たちの思いを自分の言葉で話して、それでご自身のことを語るためです。主は、彼らの土俵に乗り、それから彼らを悟らせようとしておられます。

20 それなのに、私たちの祭司長たちや議員たちは、この方を死刑にするために引き渡して、十字架につけてしまいました。21a 私たちは、この方こそイスラエルを解放する方だ、と望みをかけていました。

ずっと「過去形」で話しています。彼らにとっては、死んでしまったのだから過去の人になってしま

っていました。その過去の人には、彼らはすべてをかけていました。病を癒され、悪霊を追い出され、神の国のすばらしさを伝え、この方にこそイスラエルの贖い、救いがあると信じて疑いませんでした。ところが、ローマを倒すどころか、自分たちの指導者がこの方を十字架に引き渡すという、とんでもないことを行いました。

21b 実際、そればかりではありません。そのことがあってから三日目になりますが、22 仲間の私たちの何人かが、私たちに驚かせました。彼女たちは朝早く墓に行きましたが、23 イエス様のがらが見当たらず、戻って来ました。そして、自分たちは御使いたちの幻を見た、彼らはイエス様が生きておられると告げた、と言うのです。24 それで、仲間の何人かが墓に行ってみたのですが、まさしく彼女たちの言ったとおりで、あの方は見当たりませんでした。」

彼らの失意が、どれほどまでに真実を見られなくなっているかよく分かりますね。彼らは、イエス様に、「エルサレムに滞在していながら、近ごろそこで起こったことを、あなただけがご存じないのですか。」と言って語っていましたが、彼らこそが、「これだけ多くの人々が、イエスが生きておられると告げているのに、あなたはどれだけ悟らないのか？」ということになります。人は、事実を見ているつもりで、いや、事実は見ているのですが、真実は見えていないのです。真実は、あくまでも神のことばによるものであり、イエス様は、彼らの信仰と希望を回復させるために、じつくりと聖書全体から語られるのです。

3B 苦しみの後の栄光 25-27

25 そこでイエスは彼らに言われた。「ああ、愚かな者たち。心が鈍くて、預言者たちの言ったことすべてを信じられない者たち。26 キリストは必ずそのような苦しみを受け、それから、その栄光に入るはずだったのではありませんか。」27 それからイエスは、モーセやすべての預言者たちから始めて、ご自分について聖書全体に書いてあることを彼らに説き明かされた。

イエス様は、「愚かな者たち」と言われています。愛をもった叱責です。その愚かというのは、知識がないということの意味していません。「すべてを信じられない」というところなのです。真の知識は、主の言われたことのすべてを信じ、受け入れるところの知恵です。そこから、見えて来るものが見えてきます。

ユダヤ人たちが抱いていたメシアは、確かに聖書からのものでしたが、メシアが苦しみを受けられるというものがありませんでした。栄光と力をまとめて到来し、反抗する国々を滅ぼし、ご自身がエルサレムに神殿を建て、玉座に着かれると信じていました。これは、聖書に書いてあります。しかし、聖書は確かに、メシアは苦しみを受けられることを教えられていました。午前礼拝で、創世記から預言者全体に、メシアが苦しみを受け、それは人々の罪の身代わりの死、罪のための供え物になることを教えています。それから栄光に入ります。つまり、天におられる神の右の座に着か

れることを教えています。「詩 110:1 主は、私の主に言われた。『あなたは、わたしの右の座に着いていなさい。わたしがあなたの敵をあなたの足台とするまで。』」栄光に入られるのですから、死んでも甦り、そして昇天されることも含まれています。

主が聖書全体を説き明かされました。これがいかに大切な営みであるか、お分かりでしょうか？人々は、手っ取り早く答えがほしいと願います。そして、聖書は全体でこのことを話しているのだとして、簡単にまとめて、知った気にさせます。そして、妙に確信だけをもたせます。けれども、その人に知識は増えて高ぶらせたかもしれませんが、愛によって徳が高まったかどうかわかりません。そこには、私たちがこの弟子たちのように、現実を見て悩み、思い巡らし、論じ合うという過程がないからです。けれども、私たちには生きたイエス様に会うために、忍耐をともなった取り組みが必要なのです。

私たちの心は、聖書を初めから終わりまで、そこにある神のご計画が明らかにされていく中で、キリストを信仰の目で見ることができるようになり、恵みによって成長します。パウロも、エペソからの長老たちにこう伝えました。「使 20:27 私は神のご計画のすべてを、余すところなくあなたがたに知らせたからです。」神のご計画の一部ではなく、すべてです。そして、余すところなく知らせました。旧約聖書でも、エルサレムに帰還して、城壁を再建した民に、エズラたち、律法の学者が、「ネヘミヤ 8:8 神のみおしえの書を読み、その意味を明快に示したので、民は読まれたことを理解した。」とあります。

4B パン裂きにより開かれる目 28-35

28 彼らは目的の村の近くに来たが、イエスはもっと先まで行きそうな様子であった。29 彼らが、「一緒にお泊まりください。そろそろ夕刻になりますし、日もすでに傾いています」と言って強く勧めたので、イエスは彼らとともに泊まるため、中に入られた。

エマオにところまで来たのに、主はさらに先を行かれようとしてました。彼らのほうから、「一緒にお泊まりください。」と言っています。かつて弟子たちがイエス様に従い始めた時に、ペテロとアンデレがイエス様に、「1:38 ラビ、どこにお泊りですか。」と尋ねて、共に宿泊したことがヨハネ 1 章にあります。彼らの心に情熱が戻ってきたのです。そして、共に泊まりたいと願ったのです。

30 そして彼らと食卓に着くと、イエスはパンを取って神をほめたたえ、裂いて彼らに渡された。31 すると彼らの目が開かれ、イエスだと分かったが、その姿は見えなくなった。32 二人は話し合った。「道々お話しくださる間、私たちに聖書を説き明かしてくださる間、私たちの心は内で燃えていたではないか。」

イエスがパンを裂かれています。この時に、彼らの目が開かれたということが大事です。パン裂

きは、親密な交わりです。また、パンを裂く人はその家の主人であります。このやり方は、弟子たちならばよく覚えています。イエス様を真ん中にして食卓に着き、主が裂かれるパンで食し、そして教えを聞いたということです。最後の晩餐がそうでしたが、それだけでなく、何度となくそのような親しい交わりがあったことでしょう。その時に初めて、この方がイエス様であることが分かりました。注釈には、イエス様の手に釘の跡があったから気づいた、というものがありませんでしたが、私はそれよりも、イエス様の仕草や、神への感謝の祈りや、パン裂きの仕方など、それがことごとく、彼らが慣れ親しんでいたものであったからだと思います。私たちの聖餐式が、このようにイエスご自身に会う時となりますように。

33 二人はただちに立ち上がり、エルサレムに戻った。すると、十一人とその仲間が集まって、34 「本当に主はよみがえって、シモンに姿を現された」と話していた。35 そこで二人も、道中で起こったことや、パンを裂かれたときにイエスだと分かった次第を話した。

彼らが、主が復活されたことを悟りました。そして、エルサレムに戻っています。信仰の回復です。福音はエルサレムから広められると、イザヤが預言しています。主なる神が王として来られるエルサレムで、良き知らせが広められていきます。

そして戻って来たら、すでにペテロは主ご自身に出会っていました。他の聖書の箇所では、マグダラのマリアを含め、女たちも復活の主にお会いしています。それに加わって、二人もイエス様に出会った次第を話しました。

3A 悟るため開かれた心 36-53

そしてついに、使徒たち全員に主ご自身が真ん中に現れます。使徒たちにも、主は、聖書全体を取り上げて、それで彼らの心を開かれます。

1B 真ん中に立つイエス 36-43

36 これらのことを話していると、イエスご自身が彼らの真ん中に立ち、「平安があなたがたにあるように」と言われた。

イエス様がついに、彼らの真ん中に現れてくださいます。主は、何度となく現れて、彼らにご自身が生きている確証を与えられました。そして、その目的が「平安」です。「平安があなたがたにあるように」と言われました。彼らから恐れを払拭し、ご自身がおられることに確信から平安で満たされてほしいと願われています。ペテロは、イエス・キリストの福音を「平和の福音」と呼びました(使徒 10:36)。主は、甦られて、彼らの真ん中に現れることにより、彼らの悲しみ、嘆き、彼ら自身がイエス様を見捨ててしまったことに対する赦しも含め、すべての悲しみを拭い去り、慰めを与えたかったのです。「イザ 57:18-19 彼の道を見たが、それでもわたしは彼を癒やす。わたしは彼を導いて、

彼とその嘆き悲しむ者たちに、慰めを報いる。わたしは唇の実を創造する者。平安あれ。遠くの者にも近くのものにも平安あれ。わたしは彼を癒やす。——【主】は言われる——」

37 彼らはおびえて震え上がり、幽霊を見ているのだと思った。38 そこで、イエスは言われた。「なぜ取り乱しているのですか。どうして心に疑いを抱くのですか。39 わたしの手やわたしの足を見なさい。まさしくわたしです。わたしにさわって、よく見なさい。幽霊なら肉や骨はありません。見て分かるように、わたしにはあります。」40 こう言って、イエスは彼らに手と足を見せられた。41 彼らが喜びのあまりまだ信じられず、不思議がっていたので、イエスは、「ここに何か食べ物がありますか」と言われた。42 そこで、焼いた魚を一切れ差し出すと、43 イエスはそれを取って、彼らの前で召し上がった。

彼らは、初めに幽霊を見ていると思いました。まだ恐れが取り除かれていないのです。お分かりになるでしょうか、イエス様は変わっていないのです、その同じイエス様が、恐れがあれば、幽霊にさえ見えるのです。しかし、イエス様が確かに幽霊ではなく、血肉を持っておられることを示すために、釘を刺された手足をお見せになりました。復活の身体がイエス様に与えられても、イエス様については、この傷は残っています。なぜなら、この傷によって神の永遠の愛が示されているのです。罪の赦しが永遠であり、神は永遠に慰めを与え続けます。黙示録 5 章にて、イエス様が天に現れますが、「5:6 屠られた姿で子羊が立っている」とあります。21 章に、新しいエルサレムにおいて、イエス様はなおも「子羊」と呼ばれています。

そして、確かに肉体があり、食事さえできる体です。これが復活というものです。目に見えるものであり、実体があり、現実です。私たちのキリストへの信仰は、これだけリアルなのです。本物なのです。自分の具体的な生活に、イエス様は生きているのだというものです。自分の思い過ごしでもなく、観念でも思想でも、哲学でもありません。

2B 聖書に根差す福音 44-49

44 そしてイエスは言われた。「わたしがまだあなたがたと一緒にいたころ、あなたがたに話したことはこうです。わたしについて、モーセの律法と預言者たちの書と詩篇に書いてあることは、すべて成就しなければなりません。」45 それからイエスは、聖書を悟らせるために彼らの心を開いて、46a こう言われた。

使徒たちにイエス様が語られていたのは、預言者はすべて成就しなければいけないということでした。預言について、「わたしの関わることは実現するのです。」と弟子たちに語られていました(22:37)。そして、ここで「モーセの律法と預言者たちの書と詩篇」と言われていますが、これは旧約聖書全体ということですが、そこに詩篇を加えて、聖書全体を言い表すこともあります。実際にも、詩篇にはイエス様について語られている箇所が

膨大にあります。

そして大事なのが、「聖書を悟らせるために彼らの心を開い」というところです。これが大事です、主が私たちに心を開いてくださらなければ、どうやって聖書を知ることができるでしょうか？主が心を開いてくださるように、私たちは祈り求める必要があります。聖書は聖霊に導かれた人たちによって書かれたのですから、御霊によってわきまえ知るものだからです。ぜひ、聖書を読む時に、祈ってください、「聖霊が私たちに分からせてくださいますように。」と祈ってください。

46b「次のように書いてあります。『キリストは苦しみを受け、三日目に死人の中からよみがえり、
47a その名によって、罪の赦しを得させる悔い改めが、あらゆる国の人々に宣べ伝えられる。』

私たちに知られている、イエス・キリストの福音は、旧約聖書全体の中に啓示されていることでした。苦しみを受けることについては、午前礼拝においても引用しました、初めから終わりまで出てきます。そして三日目に甦るのですが、型として出てきます。実際に、「三日目に甦る」という言葉では出てきませんが、アブラハムがイサクをモリヤ山でいけにえとして献げなさいと命じられた時に、アブラハムは三日目にモリヤ山が見えたとあります(創世 22:4)。ヘブル 11 章では、アブラハムは信仰の中で、イサクを屠っても、よみがえって彼を取り戻すことができると信じていました(19 節)。そしてヨナが、大魚に飲まれて、三日三晩、その中にいて、陰府まで下ったけれども、三日目に出てきました(1:17)。そしてホセア 6 章 2 節には、「主は二日の後に私たちを生き返らせ、三日目に立ち上がらせてくださる。」という言葉があります。

そして、イエスの御名によって罪の赦しを与えられます。これは数多くの箇所にも、罪の赦しの約束がありますが、新しい契約を約束されたエレミヤ書 31 章 34 節には、「わたしが彼らの不義を赦し、もはや彼らの罪を思い起こさないからだ。」とあります。大事なのは、「罪の赦しを得させる悔い改め」とあることです。自動的に罪の赦しを与えられるのではありません。悔い改める者に、これまでの悪が帳消しにされるのです。同じく新しい契約の約束が書かれているエゼキエル書に、悔い改めによる罪の赦しが説かれています。「18:31-32 あなたがたが行ったすべての背きを、あなたがたの中から放り出せ。このようにして、新しい心と新しい霊を得よ。イスラエルの家よ、なぜ、あなたがたは死のうとするのか。わたしは、だれが死ぬのも喜ばない——【神】である主のことは——。だから立ち返って、生きよ。」

47b エルサレムから開始して、48 あなたがたは、これらのことの証人となります。49 見よ。わたしは、わたしの父が約束されたものをあなたがたに送ります。あなたがたは、いと高き所から力を着せられるまでは、都にとどまっていなさい。」

使徒たちが、使徒と呼ばれる所以です。使徒とは、遣わされる者という意味です。彼らがこの福

音を宣べ伝え、イエスを証言するように遣わされます。エルサレムから始まります、イザヤ 40 章に良い知らせを伝える者は、エルサレムに伝えよと呼びかけられています(9 節)。そしてその時にどうしても必要なのが、聖霊の力です。父から約束されたものを送るとイエス様が言われましたが、それはヨエル書の中に与えられています。それを待ちなさいとイエス様は言われました。同じルカが使徒の働きを後篇として書き記します。そこで、聖霊のバプテスマを彼らが受けてから、力強い証言をしていきます。私たちが、自分たちの力で伝道ができる、キリストの証しが出来ると思ったら、とんでもない間違いです。聖霊の力がなければ、何も起こりません。使徒たちは、聖霊に満たされて力ある働きをしました。

3B 昇天の祝福 50-53

50 それからイエスは、弟子たちをベタニアの近くまで連れて行き、手を上げて祝福された。51 そして、祝福しながら彼らから離れて行き、天に上げられた。52 彼らはイエスを礼拝した後、大きな喜びとともにエルサレムに帰り、53 いつも宮にいて神をほめたたえていた。

ベタニアはオリーブ山の東の山麓にある小さな村です。そこでマリヤとマルタがイエスをお迎えして、マリヤが主の言葉を聞いたところです。エルサレムに入城されてからも、宿泊はベタニアまで戻って宿泊しておられました。主にとっても弟子にとっても、親しみのあるところでした。オリーブ山から昇天されたのですが、実は、東の山麓のほうから天に昇られたことがここで分かります。

福音書を見ますと、イエス様が焦点を当てておられたのは、死んで甦ることもそうでしたが、天に戻られることが強調されています。ガリラヤにおられた時、9 章 51 節ですが、「天に上げられる日が近づいて来たころ」とあり、主は父なる神から遣わされて、そして父の身元に戻ることを強く意識しておられたことが分かります。それは、ただ物理的に移動したということではなく、この方が、あらゆる名にまさる名が与えられて、あらゆる主権や権威、力と呼ばれる勢力に対して、それよりもはるか上に挙げられたことを意味します。「エペ 1:20-22 この大能の力を神はキリストのうちに働かせて、キリストを死者の中からよみがえらせ、天上でご自分の右の座に着かせて、すべての支配、権威、権力、主権の上に、また、今の世だけでなく、次に来る世においても、となえられるすべての名の上に置かれました。また、神はすべてのものをキリストの足の下に従わせ、キリストを、すべてのものの上に立つかしらとして教会に与えられました。」

そして最後は、本当に慰められます。彼らが落胆や恐れではなく、「大きな喜びとともにエルサレムに帰り、いつも宮にいて神をほめたたえていた。」とあるからです。エルサレムにある屋上の間で、思いを一つにして祈り、聖霊が降り、そして彼らはいつも宮に行って神をほめたたえていました。そういった姿は、イスラエルの民に尊敬されていた、好意をもたれていたと使徒 5 章にあります(13 節)。私たちが、そのようでありますように。恐れや落胆ではなく、聖書全体、神のご計画の説き明かしを聞いて、生きたイエス様を知り、慰めを受け、喜びに満たされますように。